

大学共同利用機関のオーラルヒストリー

伊藤 憲二（総合研究大学院大学）

このプロジェクト課題の領域のひとつであるオーラルヒストリーについて、今年度の活動および成果についてのお話をさせていただきます。

オーラルヒストリーの概要

この領域の概要としましては、すべての基盤機関のオーラルヒストリーを実施することは不可能ですので、主に以下の研究所を対象にインタビューをすすめようと考えてまいりました。今年度の重点領域としては、ハワイ観測所、KEK、生命系研究所（とくに遺伝研）、分子研（および総研大の設立）、統数研、核融合研（核融合研のグループで独自に）があげられます。

ハワイ観測所

今年度は特に、ハワイ観測所を中心に研究いたしました。ハワイ観測所については、観測所と地域コミュニティ（日系人コミュニティおよびハワイ人コミュニティの2つの観点から）との関係についてを中心にインタビューを実施し、コハラセンターを通じた提携を基に、今後のオーラルヒストリープロジェクトの雛形を形成したいと考えております。

ハワイ観測所と地域コミュニティ

ハワイ観測所の特徴的・おもしろいところと言いますと、まず第一に日本の外につくられた研究施設であるということ、すばるの山岳施設のあるハワイ島・ヒロという日系人の多いところに位置しているところ、ハワイ人コミュニティとの関係、ハワイ独自の文化、ハワイ人文化と彼らにとって神聖なるマウナケア山の頂上に天文台をつくることに対する双方の見解の違い・衝突について、地元と天文台で働く人々との関係、そしてアメリカ本土がつくった Keck 天文台をはじめとする他の天文台群と比較される点などがあげられます。

第 I 部 本研究課題の成果報告

コハラセンターとの提携

コハラセンターは、地域の環境や文化に関する研究・教育の仲介・斡旋を行っている米国ハワイ州ハワイ島にある小規模な民間研究機関（NPO）です。過去に米国大学や政府と関係してきた機関です。地元との接触の仕方など、ハワイの事情をよく把握するためにコハラセンターを通して以下 2 名をはじめとする研究者を紹介していただき、協力を得ることができました。メアリー・パレフスキー氏は UNLV にてネヴァダ核実験場に関するオーラルヒストリープロジェクトを指揮されました。何度か総研大にも来ていただいたことがあります。もうひとり、イヴォンヌ・カーター氏は長い経験と実績をもつオーラルヒストリアンで、ハワイ島在住のハワイ人です。

今後のオーラルヒストリーの雛形

今年度から来年度にわたり、コハラセンターとの提携およびパレフスキー氏とカーター氏と協力し、すばるに関するオーラルヒストリーを 30 件程度の収集し、システムティックなオーラルヒストリーのプロジェクトを遂行する予定となっております。ハワイサイドでは 20 件、日本サイドに関しては当グループで 10 件ほどのインタビューを実施する予定です。また、ここで用いたシステム、特に同意書の作成やインタビューの手法・編集方法などを他のケース（たとえば KEK）にも雛形・モデルとして応用したいと考えています。

KEK オーラルヒストリー計画

次に、高エネルギー研究加速器機構（KEK）オーラルヒストリー計画に関しましては、前年度より続けて重点をおき、インタビューを実施しております。主に、日本における高エネルギー物理学の成立初期の経緯、KEK/PS、そして特にサポートスタッフ、地域との関係、産業との関係の 3 点に着目して計画を長期ですすめていく予定となっております。

生命科学系オーラルヒストリー計画

生命科学系オーラルヒストリーは、遺伝研、基生研などの施設を中心に、総研大・上級研究員の瀧川裕貴が担当をしてすすめております。

その他のオーラルヒストリー

その他の分野のオーラルヒストリーとして、以下 2 研究所に関する研究を随行いたしました。(1) 分子研および総研大の創設に関し、木村克美先生のインタビューを総研大・センター研究員の菊池好行が実施いたしました。長倉先生へのインタビューも予定されております。(2) 統数研にて赤池先生へのインタビューを本学の瀧川が担当することになっております。

第1章 大学共同利用機関のオーラルヒストリー（伊藤）

日常的活動

ここまでプロジェクト随行計画にまつわる具体的な説明をいたしましたが、ここで総研大における日常的な活動について紹介いたします。毎週水曜日には葉山・東京周辺のメンバーを中心にランチミーティング（年度前半にはほぼ週一回から隔週）を実施しております。そして、年度前半には3回の全体規模のミーティングを開催いたしました。年度後半は学会やシンポジウム参加のため、それまでのペースでミーティングを開催することは難しくなりました。

現在までのインタビュー

さて、前年度からの継続分を含め、本日までに実施された今年度のインタビュー（成果物）をあげさせていただきます。

KEKに関するインタビューは、

- サポートスタッフ
- 配偶者
- 三浦靖子氏
- 真木晶弘先生

に対して行われました。

ハワイ観測所に関しては、

- 林正彦先生
- 林左絵子先生

に対して実施され、さらにブレインインタビューとして

- 成相恭二先生
- Prof. Don Hall,
- Dr. Peter Giles,
- Mr. Russell Oda

からお話を伺うことができました。

遺伝研に関するインタビューは太田朋子先生に、そして分子研に関するインタビューは木村克美先生にそれぞれ実施いたしました。

第I部 本研究課題の成果報告

翻訳

翻訳に関しましては、Valley Yow 著 Recording Oral History の翻訳を前年度の総研大・上級研究員であった安倍尚紀が担当し、吉田かよ子教授（北星学園大学）が監訳いたしました。既に出版されている予定でしたが、実際にはまだされておりません。

国内・国外 学会発表

次に、今年度の国内および国外で行われた学会発表についてお話しさせていただきます。まず、以下にあげる3つの国内での学会およびシンポジウムに参加し、発表いたしました：

- 日本科学史学会シンポジウム

2007年5月26・27日に京都産業大学にて年会に参加、シンポジウムタイトルは「日本科学史研究におけるオーラルヒストリー」。具体的な研究内容などについて発表いたしました。

発表者および参加者、そして発表タイトルは、

- － 伊藤憲二「歴史研究の方法としてのオーラルヒストリーの理論」
- － 平田光司「総研大におけるオーラルヒストリー計画」
- － 高岩義信「高エネルギー物理学研究所設立の経緯に関するオーラルヒストリー」
- － 伊藤憲二「国境を越えた物理学者たち：戦後日本人物理学者の北米体験と科学の国際化」
- － 松本三和夫（ディスカッサント）

- 日本オーラルヒストリー学会

2007年9月15・16日に日本女子大学にて開催、自由（団体）論題報告として「科学技術のオーラルヒストリー」という題で以下の者がそれぞれ科学技術観点にまつわる発表をいたしました。

- － 伊藤憲二「科学技術社会論におけるオーラルヒストリー」
- － 安倍尚紀「科学・技術分野に於けるオーラルヒストリーの方法論的な諸問題—社会学の視点から」
- － 平田光司「総研大におけるオーラルヒストリー計画」
- － 木村一枝「核融合アーカイブスにおけるオーラルヒストリーの試み」

第1章 大学共同利用機関のオーラルヒストリー（伊藤）

- 日本科学技術社会論学会

2007年11月10・11日に東京工業大学にて「日本の研究所に対する社会的研究（ソーシャル・スタディーズ）：新しいラボラトリー・スタディーズを目指して」というタイトルのワークショップが開催されました。発表者とタイトル、および参加者は以下のとおりです。

- － 伊藤憲二「原子核研究所と田無問題」
- － 大谷卓史（吉備国際大学）「情報処理研究における電子技術総合研究所の役割定義の動揺：1966年～1982年」
- － 佐藤靖「歴史からみた宇宙科学研究所（ISAS）の特色」
- － 平田光司「KEKにおけるBファクトリー」
- － 討論者1 中井浩二
- － 討論者2 松本三和夫

そして以下にあげる国外での学会に参加し、発表いたしました：

- Commission of Women in History Workshop
（国際女性科学史学会、科学と女性分科会）

2007年7月6～9日にかけて、Networking in science and technology: the gender perspective」というテーマで、ギリシャ（Syros）、Ermoupolisにて行われました。伊藤憲二により、“Women Network at KEK: Gender, Physics, and Wives of High-Energy Physicists in Japan”というタイトルの、KEKと女性の科学に関するトークが発表されました。

- Society for Social Studies of Science
（STS関連の有名な国外団体）

2007年10月12日に、カナダのモントリオールにて、Annual Meetingが開催されました。

伊藤憲二より、“Big History of Science”: A large scale oral history project of a big-science laboratory in Japan”という題のオーラルヒストリーの監修に関するトークが発表されました。

- Seoul National University（ソウル大学）

2007年10月8日、History of Science Programにおいて、伊藤憲二より“Rubber Boots and Particles: Women’s Networking and Early Years of High-Energy Physics in Japan”というタイトルで発表がされました。

第I部 本研究課題の成果報告

- Oral History Association (OHA)
2007年10月27日、OHA Annual Meeting が米国カリフォルニア州オークランドにて開催されました。
伊藤憲二より、“Enemies on (Almost) All Sides: Launching a Large Scale Oral History Project in a Hostile Environment” という表題の、オーラルヒストリーに関するトークが発表されました。

以上、当プロジェクトの成果物の紹介・活動報告を行いました。今年度の主な目的はオーラルヒストリーの枠組みをつくること、あわせてインタビューの実施を行い、そのトランスクリプトを作成することでした。学会発表はかなり活発に行いました。まだ、成果物を出すことよりも、枠組みを形成することがメインであったと認識しております。来年度はトランスクリプトの作成・公開、および公開の仕組みをつくること、そして学会発表だけではなく学術論文を雑誌に投稿すること、さらにまとまったかたちの研究にすること、が重要な課題になってくると考えております。

【質問・コメント】

小沼 “Enemies on (Almost) All Sides: Launching a Large Scale Oral History Project in a Hostile Environment” とありますが、これはどういう意味ですか？

伊藤 日本国内でオーラルヒストリーのプロジェクトをすすめていくにあたり、色々と反対が多い、という話しです。第一に、人にインタビューを行うことは主観的な意見を記録することにつながり、事実を語られるとは限らない、という批判があります。つまり、伝統的な歴史学というものは人の、口承によるものではなく、アーカイブ資料に基づいて行われるということであり、それが客観的な歴史であるという見方が正統的であり、かつての主流でもあったわけです。それに対し、オーラルヒストリーというものは記憶に基づくものであり、人によっては主観的なものであり、歴史的な事実とは異なると言われることもある。そのため、方法論的に問題視・批判されやすいのです。こういった方法が学問的な理解を得ることが難しいところもあり、単なるジャーナリズムとの違いを問われたり、誤解されたりすることもあります。このタイトルは多少大げさに表現されてはおり

第1章 大学共同利用機関のオーラルヒストリー（伊藤）

ますが。‘Almost ’とありますように、誰もがそう言っているわけではありません。協力してくださる方々もたくさんいらっしゃいます。特に日本科学史学会で発表した際には、好意的ではありませんでした。これは、オーラルヒストリー全体が乗り越えなければいけない困難と考えます。学会の外部だけに限ったことではなく、総研大内部でさえも色々な手続き上、スムーズに行く訳ではなく、大変なことは沢山あります。特に日本ではオーラルヒストリーが広く認知されていないことも原因であると思います。

このトークは米国の OHA 学会にて発表したものであり、日本という国におけるオーラルヒストリーに対するアメリカとの風土の違いについて紹介したものです。アメリカでは 60 年代後半から多々実施されています。例えば、アメリカでは一番有名かと思われる科学史家、トーマス・クーン [Thomas Samuel Kuhn] という人と幾人かが中心となり、70 年代を中心に、Archives for the History of Quantum Physics Project (AHQP) と呼ばれている大規模なオーラルヒストリープロジェクトにて、1920~30 年代に量子力学の成立に寄与した物理学者よりオーラルヒストリーを蒐集しました。このプロジェクトや科学技術史に限らず、アメリカにはそういったオーラルヒストリーの伝統・文化があります。プロジェクトの一環として個人が聞き書きをし、オーラルヒストリーを実施し、自分たちで管理・公開して共有の知的資源とし、ほかの関係者も使用できるようにする。しかし、科学技術史に限って言えば、日本ではそういうことが殆どされていないのが現状です。オーラルヒストリーを蒐集し、出版されたものはいくつかあり、個人で献身的にされている方もおられますが、なかなかアメリカのような規模では行われておりません。

小沼 書いたものならばよいかと言うと、書いた人が思い出しながら書いているわけだから、事実との間にギャップがあるという意味では五十歩百歩ですね。

伊藤 書いたものにも色々ありまして、回想に基づくものもあれば、リアルタイムでその場で書かれたものもある。歴史家の責任で資料化をし、扱わなくてはなりません。

小沼 リアルタイムで書かれたものも、全てが事実に基づいて書かれたわけとはかぎらないのではないのでしょうか？(校正時小沼注：私はオーラルヒストリーも回想記も出し耳朶と思います。限界があることを利用者が注意していることが大事なのです。)

伊藤 そうですね。

第I部 本研究課題の成果報告

荒船 「すばる」の記録を重点的にやられるということは時期として非常によいと思われま。古在由秀先生など（小田稔先生は故人になってしまわれましたが）のインタビューをされたらよいと思います。すばる設立のスタイルはKEKのそれとかなり違って、例えば加速器の人たちは自ら詳細な設計をしておりましたが、すばるの場合は三菱へ委託していた。やり方・すすめ方の違いや調査期間の違いなど、研究や技術と直結している点、予算をとったり消化したりする点の外国との違いなども是非調べていただきたい。

伊藤 ありがとうございます。早くオーラルヒストリーをやらなければいけない分野というのは、実はたくさんあるということは承知しておりますので、がんばっていきたくております。今お話しされた中で、科学と社会の関わり、研究者と企業との関係、もしくは研究所・者と政府機関との関係といったことも重要なテーマであると考えております。

西村 仁科先生が戦前から戦後にかけて外国の一流の方々との手紙のやりとりをされたものが資料として仁科財団に残っています。その内容と我々がうわさで聞いていた話とかなり方向が違っているというようなものもありますが、最近それらの手紙を編集して、仁科芳雄往復書簡集としてみすず書房から出版されました。全3巻でかなり大部のものですが、是非参考にされるとよいと思います。

伊藤 私自身、学位論文は仁科芳雄を中心に書きました。いずれ出版しなくてはならないと思っはいるのですが、その資料が出てきて自分の仕事が楽になったのかどうかはわかりませんが、十分利用させていただいた上で本にまとめたいと考えております。

村上 オーラルヒストリーの資料の保管についてお尋ねいたします。一昨年前、生理学研究所の方へシャロン・トラウィーク [Sharon Traweek] 氏らが来られ、女性研究者のこれまでの経歴、それから留学してきた若い研究者についてのオーラルヒストリーを蒐集されました。その資料が現在どこにあり、どのような管理のされ方をしており、どのようにすれば閲覧できるのかといったことがすすめられているのかどうか、教えていただけますか？

伊藤 実はトラウィーク氏は前年度、かなりの量の映像を撮ってインタビューされました。それは現在、テープというかたちで総研大のほうに保管されております。ようやくハードディスクに移行し、デジタル化、DVDを作成する作業が終わったところです。これからその取り扱いについて議論するところです。ひとつは語り手の方々に許可をいただいていないため、どの程度まで公開が許されるのかご

第1章 大学共同利用機関のオーラルヒストリー（伊藤）

相談させていただきたいということ、それをもとにテープ起こしするのかわか、映像として配信するのかわか、もしくは総研大で閲覧を可能にするのかわか、といったことを来年度以降考えていかななくてはなりません。トラウイク氏が中心となってすすめられてきたわけですが、彼女もなかなか忙しい方なので話し合う機会をもうけることができません。我々も同意書をとるプロセスなども含め、もう少しシステムティックに考えていく方針が必要であると感じております。こういうこともあり、ネバダ大学でシステムティックに事を運ばれているパレプスキー氏との更なる連携をすすめ、同意書に関することや了解を得た上ですすめていく手法などを学びたいと思っております。トラウイク氏自身は文化人類学者であり、オーラルヒストリーの専門家ではございませんでしたので、手続き上に関してはまだ不慣れなところがあったのだと思います。今後、彼女と相談した上で対策をたてていきたいと存じます。テープ等の現物は、総研大の方で保管させていただいております。

以上、オーラルヒストリーに関する報告発表を終わらせていただきます。